— 苫小牧市立緑小学校 —

令和4年度 学校関係者評価

【「学校評価の結果」欄の評価基準】

Ａ … 肯定的な評価90%以上の項目
Ｂ … 肯定的な評価70以上90未満の項目
Ｃ … 肯定的な回答70%未満の項目

※自己評価欄には、各項目のＡＢＣの状況を総合的に判断して記載しています。
※学校評価の結果の「□」は教職員による評価内容、「・」は児童及び保護者による評価内容を示しています。
※学校評価の結果欄の数値は、アンケートで「十分当てはまる」「概ね当てはまる」を合計した割合を%で表しています。
※学校評価の結果欄の(○→○)内の数値は、令和３年度と令和４年度の経年比較を記載しています。

Ａ ： 十分適切である。　Ｂ ： 概ね適切である。　Ｃ ： 不十分で再検討を要する。

□確かな学力をはぐくむ

学校経営の重点達成を目指す具体的実践事項	具体的な取組	学校評価の結果	自己評価	次年度の方向性	自己評価の妥当性	方向性の妥当性
○学力検査等の諸調査の結果を踏まえた「学力向上のための学校改善プラン」の推進	○校内研修体制の確立 ○子どもに分かる授業づくり ○宿題の質の向上　○小中連携	□学力向上のための学校改善プランを踏まえた学習指導を進めています。 (R3：96.7→R4：100)	A	■学力向上委員会による進行管理（不断の見直し・改善） ■進行状況の可視化	A	A
○諸調査の結果を生かした授業改善（成果と課題の明確化、本質的な原因の特定、焦点化された改善）	○単元テスト（全学年で実施） ○振り返りテスト（５，６年で実施） ○チャレンジテスト（全学年で実施） ○算数アンケート（全学年で実施） ○学力向上委員会　○通知表	□チャレンジテスト、単元ごとのテスト、本校独自の振り返りテストなどの結果を授業改善に役立てています。(100→93.1)	A	■結果の分析→原因の特定→焦点化された実効策の検討・実施（マネジメント・サイクルの活性化）	A	A
○ねらいを明らかにし、児童の主体的な学びを保障する授業（主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善）	○校内研究における授業改善（日常の授業改善（今年度の目指す授業は、「分かる授業」「できる授業」です。） ○日常の授業実践	□授業のねらいをはっきりさせ、児童に見通しをもたせた授業をしています。(100→96.5) ・学習のめあてを理解して授業に取り組む児童は、９割以上（95.5→92.3）となっています。 ・「授業で自分の考えを言ったり、友達の考えを聞いたりすることが多い」と捉えている児童は、９割程度（89.3→90.4）となっています。	A	■主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ■児童の姿を根拠とする評価（授業における児童の学習状況の把握と、児童の姿に裏打ちされた学習指導の改善）	A	A
○習熟度別、ティーム・ティーチング等による算数科の基礎的・基本的な学習内容の定着（指導方法の工夫改善）	○習熟度別やティーム・ティーチングによる少人数指導（算数２～４年） ○習熟度別による指導（算数５、６年） ○学習支援員による低学年への支援	□２年生以上の学年で、児童の学習内容の理解と定着を図る習熟度別指導や、ティーム・ティーチングを進めています。(90.3→93.1) ・「少人数による授業は分かりやすい」と捉えている児童（２年生以上）は、９割（94.6→95.0）となっています。	A	■緑小としての習熟度別指導のスタイルの確立（学年の温度差のない指導）	A	A
○「学ぶ意欲」を高め、「表現力」を伸ばす指導過	○校内研究による指導力の向上 ○日常の授業実践	□言語活動を適切に位置付け、児童に単元のゴールを示し、見通しを持たせた授業を行っていま	A	■自分の考えをもつ、仲間の考えを聞き、自分の考えを深める、自分の考え		

程・指導方法（授業づくり、言語活動、課題の精選、発問、交流等）	○ＰＣ、書画カメラ等のＩＣＴの活用	す。（96.7→96.6） ・「先生の授業はよく分かる」と捉えている児童は、９割（90.9→91.4）となっています。		をまとめる場と位置付けた授業	A	A
○共通の指導事項を踏まえた緑小の学習環境づくり（ノート、板書、学習のきまり、宿題、家庭学習）	○緑小「学習のきまり」 ○緑小「授業のルール」 ○家庭学習（うちガク）手引きの作成と配布	□担任が変わっても、児童が学習や生活に戸惑わないよう緑小の「学習のきまり」や緑小の「授業のルール」に基づき、授業を進めています。（100→93.1） ・「学習のきまりを守って授業に取り組んでいる」と捉えている児童は、９割程度（93.7→97.2）となっています。 ・「丁寧にノートに書くことを意識している」児童は７割程度（76.2→73.1）となっています。	A	■「学習のきまり」「授業のルール」の確認と指導の徹底 ■学年の発達段階に応じたノート指導	A	A
○各教科等の学び（学習内容）を相互に生かす教育活動（各教科等の横断的な視点の重視）	○総合的な学習の時間の学習活動 ○通知表の所見 ○各教科等の学習活動 ○日常の授業実践	□教科等の関連を図った授業実践については、８割（83.3→86.2）の達成状況になっています。 ・「国語や算数などの勉強が他教科等の学習で役に立っている実感をもつ」児童は、９割程度（90.8→91.2）となっています。	A	■他教科との関連や学んだことが使える・役立つ実感をもたせる授業	A	A
○読書の環境整備と読書習慣の定着（読解力を高める）	○朝読書の実施 ○図書室の活用 ○親子読書週間の実施	□朝読書による意欲喚起（93.1→82.7）、読書環境の整備（83.3→85.7）などの取組に課題があります。 ・「朝読書に集中している」児童（91.6→90.5）、「学校図書室で本を借りている」児童（52.8→60.6）が増加傾向。 ・「子どもが家庭で読書をしている」と捉えている保護者は４割程度（43.3→46.5）、児童は７割程度（67.1→70.6）と増加がみられます。	C	■朝読書のねらいの確認と内容の充実 ■学校図書室の利活用 ■教室の読書環境の整備 ■学校図書司書による図書室の利活用、読書への意欲喚起に関する助言	B	B
○予習・復習に役立つ宿題と自ら課題を見付け解決を図る自主学習の充実（うちガク）	○家庭学習（うちガク）手引きの作成と配布 ○宿題 ○家庭学習に関する調査（うちガクチェックシート）の年２回の実施	□学習内容の定着に向けて、授業と関連付けた宿題を用意しています。（93.3→89.6） ・「子どもが家庭学習をしっかりやっている」と捉えている保護者（73.6→77.2）に対し、児童（89.9→92.1）も増加しています。 ・「宿題が学校で勉強したことの予習や復習に役立っている」と捉えている児童（92.8→91.0）は昨年度同等。 ・目安とする時間を家庭学習の時間として取り組んでいる児童は、約６割程度（58.1→68.5）	B	■授業に生かせる宿題、授業内容の定着を図る宿題など、宿題のねらいの明確化と内容の吟味	B	B

		となっています。				

□豊かな心をはぐくむ

学校経営の重点達成を目指す具体的実践事項	具体的な取組	学校評価の結果	自己評価	次年度の方向性	自己評価の妥当性	方向性の妥当性
○道徳的な課題を自分自身の問題と捉え、自分自身と向き合う「道徳科」の指導（含む授業公開）	○道徳教育推進を担当する教師によるモデル授業 ○道徳の指導計画（全体、年間、別葉）の作成 ○日常の授業実践 ○教職員向け道徳だよりの発行	□児童が道徳的価値の自覚を深める道徳の授業については、８割程度（82.8→78.6）の達成状況となっています。 ・「道徳の授業が好き」と回答した児童は、７割程度（76.0→74.8）となっています。 ・「道徳の授業では、いつも自分なりの考えを持つことができる」と捉えている児童は、９割程度（92.4→94.1）。	B	■主体的・対話的で深い学びに向かう授業改善 ■ねらいの明確化、教科書・読み物資料の教材研究や発問内容の吟味	B	B
○「生命尊重」「向上心」「個性の伸長」（自己有用感、自尊感情）「礼儀」を重点とする教育活動	○キャリア・パスポートの活用 ○道徳の授業実践 ○日常の学習指導や生徒指導	□教育活動の全体を通して、「生命尊重」「向上心」「個性の伸長」「礼儀」を重視した指導を進めています。（96.7→96.6） ・気持ちのよい挨拶について、児童は学校では（87.9→88.2）、家庭（86.7→87.9）や地域（78.2→81.5）となっています。 ・「子どもが正しい言葉遣いをしている」と捉えている保護者が（83.0→83.0）に対し、児童も同等（83.4→84.4）。	B	■児童が課題と捉える左記４項目を重点とした道徳の授業実践 ■左記４項目を意識した教育活動の実践 ■あいさつ運動など、委員会活動による児童の自主的な活動	B	B
○学校生活における児童の道徳的実践の見取り（実態把握）と実態に基づく授業改善	○道徳の授業実践 ○通知表の所見	□児童の見せる姿から実態を把握し、道徳の授業改善を進めているのは、(86.7→79.3) となっています。	B	■児童の姿を根拠とする評価（児童の日々見せる姿や学びの蓄積）	B	B

□健やかな体をはぐくむ

学校経営の重点達成を目指す具体的実践事項	具体的な取組	学校評価の結果	自己評価	次年度の方向性	自己評価の妥当性	方向性の妥当性
○新体力テスト等の結果を踏まえた体力向上プランの推進と授業改善（指導に生かす評価）	○跳ぶ力・持久力に関する運動（縄跳び、フォームロケット、ラダー） ○授業改善　○新体力テストの実施 ○どさん子元気アップチャレンジ	□体力向上プランを踏まえた学習指導については、９割強（92.3→100）の達成状況となっています。 ・「体育の授業が楽しい」と捉えている児童は、９	B	■保体部による進行管理（不断の見直し・改善） ■進行状況の可視化	A	B

	○生活習慣の確立（「生活手帳」「生活リズムチェック」）	割程度（90.9→90.3）となっています。 ・「積極的に体を動かしている」と捉えている児童は、休み時間では（68.8→73.7）となっています。				
○「早寝、早起き、朝ご飯」等の基本的な生活習慣の定着と健康の保持増進を図る学習活動（心身の健康の保持増進に関する教育）	○生活リズム調べの実施 ○「ほけんだより」「保健室からこんにちは」の発行 ○アレルギー調査の実施 ○健康カードの配付 ○各種検診・測定・検査の実施 ○健康観察シートの提出	□児童の基本的な生活習慣を整えるための指導を進めています。（100→89.7） ・「子どもの生活リズムが整っている」と捉えている保護者が８割程度（81.3→81.2）に対し、児童は６割程度（67.1→67.9）となっています。 ・「子どもは朝昼夜の食事をしっかりととっている」と捉えている保護者が９割強（94.3→93.6）に対し、児童も９割程度（94.7→92.3）となっています。	A	■遅刻「０」に向けた取組 ■委員会活動による児童の自主的な活動	A	A
○食に関する教育、安全に関する指導の全体計画に基づく指導	○給食指導　○引き渡し訓練 ○食育指導（栄養教諭）の実施 ○避難訓練（年２回地震津波）の実施 ○各種教室（自転車、青空、交通映画、防犯教室、冬道の交通安全教室）	□外部と連携し、指導計画に基づく指導を進めている（72.4→69.0） ・「子どもが家庭で健康に気を付けた生活を過ごしている」と捉えている保護者が９割（90.4→93.0）、児童も９割程度（94.7→92.9）となっています。	B	■児童の自己評価（学んだことや感じたことの記述）の蓄積と充実を目指した実施内容の検討	B	B

□特別支援教育を進める

学校経営の重点達成を目指す具体的実践事項	具体的な取組	学校評価の結果	自己評価	次年度の方向性	自己評価の妥当性	方向性の妥当性
○個の特性に応じた一貫性のある各種計画の作成及び効果的な指導の充実（教育課程の編成・実施、各種計画の活用）	○個別の教育支援計画の作成と活用 ○個別の指導計画の作成と活用 ○教育相談の実施	□特別支援学級や通級による指導において、指導計画の作成と児童の姿を捉えた評価を進め、指導計画を随時見直し指導に当たっています。（89.7→100） ・「児童の実態に応じた教育活動を進めている」と捉えている当該児童の保護者は８割（80.0→83.3）となっています。（特別支援学級及び通級指導教室に在籍する児童の保護者への設問です。）	B	■児童に関する情報共有及び児童の実態に基づく教育活動の推進	B	A
○特別支援学級、通級指導教室、通常の学級の連携による学びの環境整備（指導の充実、交流	○校内特別支援会議の実施 ○特別支援教育コーディネーターによる調整 ○市教委、市教育支援委員会との連	□教職員それぞれの児童理解の状況を共有し、児童一人一人の特性に応じた指導の在り方を検討し、指導に生かしています。（86.7→100）	A	■特別支援教育コーディネーターを中心にした校内組織・校内体制の活性化	A	A

学習、教育相談体制）	携					
○通常の学級における特別な教育的支援を必要とする児童への指導	○通級指導教室による個に応じた指導 ○特別支援教育支援員の配置	□「全体への配慮が十分であると、個別の支援が必要だったはずの児童が、全体の配慮の中で個別の支援がなくても力を発揮できる」という考え方で、学習指導や学級経営を進めています。（86.7→100）	A	■特別支援教育の考え方を踏まえた学習指導や生徒指導の実践	A	A

□生徒指導の機能を生かす

学校経営の重点達成を目指す具体的実践事項	具体的な取組	学校評価の結果	自己評価	次年度の方向性	自己評価の妥当性	方向性の妥当性
○教職員と児童、児童相互の共感的なかかわりを大切にした教育活動	○日常の授業実践 ○日常の教育活動の実践	□生徒指導の３機能（自己決定・自己存在感・共感的な人間関係）を大切にした指導を進めています。（96.5→96.5） ・「先生たちはがんばったことや努力したことをほめてくれる」と捉えている児童は、９割程度（94.0→91.2）となっています。 ・「お子さんは、学校での出来事を家族によく話をする。」 （83.5→83.3）となっています。	A	■積極的な生徒指導に対する共通理解 ■予防開発的な生徒指導に関する研修 ■ありのままの児童を受け入れる教職員の姿勢	A	A
○良好な人間関係を構築し、いじめを許さない、不登校を生まない風土を醸成する指導	○いじめアンケートの実施 ○緑小「学校いじめ防止基本方針」に基づく対応 ○日常の授業実践 ○日常の教育活動の実践	□日々の学校生活における児童の言動に注意深く見聞きし、未然防止に努めるとともに、発生した問題に対し早期解決に向け迅速に対応しています。（100→96.5） ・「自分も友だちも大切にして学校生活を過ごしている」と捉えている児童は、（94.9→96.2）となっています。 ・「学校はいじめの未然防止、早期発見・解決に向けた取組に努めている」と捉えている保護者は、６割（61.0→69.3）となっています。	B	■日常の学校生活における児童の変容やサインの注視 ■いじめは絶対に許さないという毅然とした対応 ■支持的風土を生み出す学級経営、教科経営 ■不登校の兆候の把握と対応 ■保護者・関係機関・学校が連携したアプローチ	B	B

○共感的理解・客観的理解・多面的理解に基づく児童理解と教職員の協働による生徒指導	○生徒指導交流の実施 ○生徒指導対策会議の実施 ○少人数指導、習熟度別指導、ＴＴ等による協働的な指導 ○各種アンケートによる児童理解	□児童に対する情報交流が日常的に行われ、学級、学年、生徒指導部等の役割を明確にしながら、教職員間のつながりのある指導を進めています。（96.7→100） ・「学校は、担任だけではなく、いろいろな先生が子どもと関わりをもって学校生活を過ごせるようにしている」と捉えている保護者は、７割程度（77.4→81.2）である。 ・先生は、自分の話を真剣に聞き、相談に乗ってくれ、適切なアドバイスをくれる。（93.0→91.7）	A	■教職員による情報共有 ■問題行動等の早期発見・早期解決 ■校内組織の活性化（風とおしのよい組織）	A	A

□家庭・地域とつながる

学校経営の重点達成を目指す具体的実践事項	具体的な取組	学校評価の結果	自己評価	次年度の方向性	自己評価の妥当性	方向性の妥当性
○地域の人材・施設・自然を積極的に活用した地域に学ぶ教育活動	○校外学習・見学学習の実施 ○外部機関を活用した学習活動（防犯教室、書き初め教室、食の指導、こころの授業、博物館郷土学習、人権教室、虫歯予防教室、薬物乱用防止教室、科学センター学習、租税教室、認知症キッズサポーター）	□地域の教育資源を計画的に活用した児童に実感の伴う学びの場や機会の提供については、（86.2→86.2）の達成状況となっています。 ・「外部講師の講話や校外学習が好き」と捉えている児童は、（93.2→91.5）となっています。	B	■効果的な学習とするための目標と学習内容、活動内容の見直しと改善 ■児童の自己評価（学んだことや感じたことの記述）の蓄積と充実を目指した実施内容の検討	B	B
○児童の学びの連続性を踏まえた幼稚園・保育園、中学校との連携	○幼稚園・保育園との交流会 ○新入学児童の体験入学 ○中学校の授業体験の実施	□新型コロナウイルス感染防止の観点から、幼稚園児・保育園児との交流活動（41.3→79.3）が実施できない状況から、少しずつできることを再開しています。 □中学校での体験活動（75.0→79.3）は、乗り入れ授業と合わせて緑小にて体験入学説明会を行いました。	B	■効果的な学習とするための目標と学習内容、活動内容の見直しと改善	B	B
○教育活動、経営活動の積極的な公開（開かれた学校）	○参観日、自由参観日、個別懇談、運動会、学習発表会	□参観日、運動会や学習発表会等、制限の中でも可能な限り保護者が教育活動を参観する機会を設けることができました。（83.3→96.5）	A	■新しい学校の生活様式を踏まえた教育活動の実施状況に対する情報発信の在り方や方策の検討	A	A
○学校・学級通信、地域向けだより、学校ホームページ等による教育活動等の情報発信	○学校だより、学年通信、学級だより、ほけんだより、保健室からこんにちは、生徒指導だより等の作成、配付	□分かりやすい内容で児童の様子や学校の様子を保護者に伝えていることについては、９割（93.3→100）の実施状況となっています。 ・「学校は通信等を用いて教育活動の様子を分か	A	■効果的な情報発信 ■教職員の負担増のない情報発信の在り方の検討	A	A

	○さくらメールによる緊急連絡 ○ＨＰの更新	りやすく伝えている」と捉えている保護者、９割（90.3→91.8）。 ・「学校からの配付物にしっかりと目をとおしている」保護者は、９割（93.8→93.0）となっています。				

□経営方針関連

学校経営の重点達成を目指す具体的実践事項	具体的な取組	学校評価の結果	自己評価	次年度の方向性	自己評価の妥当性	方向性の妥当性
○ゴール（到達目標）を明確にしたＰＤＣＡサイクルに基づく協働的な教育活動	○学校評価（教職員、保護者、児童）の実施 ○授業評価（教職員自己評価）の実施	□教育活動を進めるに当たって、目標を明確にして取り組み、児童の姿から改善を進めています。（100→96.5）	A	■指標との関連を図った目標設定 ■目標と内容の精査	A	A
○日常に教育実践につながる研修（専門性の向上）	○校内研修（低・中・高・特による４回の研究授業と全体協議） ○小中学校の公開研究会への参加 ○教育委員会による学校教育指導 ○教育委員会、市教育研究所主催の研修会への参加	□校内研修による学びを日常の授業改善に生かしています。（80.0→100）	A	■研究内容を踏まえた日々の授業実践（毎日が研究授業とする意識）	A	A
○学校組織の活性化と仕事の効率化	○電話対応の時間設定 ○理科専科指導（高学年の時間確保） ○評価業務の時間設定 ○学年主任会議、学力向上委員会、生徒指導対策会議、教育支援委員会による発信 ○教材の共有化	□校務部会、学年部会、校内各種委員会で建設的な話合いが行われ（100→96.5）、組織的な取組を進めています。（96.7→96.5） □教職員の働き方に関して、「見通しをもった仕事」「タイムマネジメントを意識した仕事」に対する肯定的な回答が増加しています。（70.0→82.7）	B	■学校の教育活動の精査（活動のねらいの明確化、実践結果の可視化） ■教職員個々の仕事スタイルの不断の見直し ■教育活動に費やす時間と実効性の把握	A	A
○教育公務員としての自覚と法令遵守の徹底（法令遵守）	○職員会議等による指導、研修 ○道教委、市教委の通知を踏まえた教職員への指導、啓発 ○学校職員人評価制度における面談	□教育公務員としての自覚ある言動と法令遵守に努めています。（100→100）	A	■児童の一番身近な教育環境として影響力が大きいことの自覚	A	A
○学校の教育活動の進捗状況や改善方策の報告、説明（説明責任）	○各調査、アンケート結果の実施 ○通知表の作成、配付 ○個別面談の実施	□学校行事等への参観ができない中、学校だより、学年・学級通信等の紙媒体を用いて学校の教育活動の進捗状況等を家庭や地域に伝えています。（100→100）	A	■データによる効果的・効率的な情報提供	A	A

○ご意見、ご要望、改善を要すること記入欄

・R４年度よりもポイントが上がっておりPDCAサイクルに基づいた学校改善が進んでいることを感じさせていただきました。自己評価でCの項目については、今後の学校課題として取り組みが展開されていくことを期待いたします。R５年度からは、コミスク導入となりますが、地域の方のお力添えをいただきながら、ともにエリア内でより良い教育活動を推進させていきましょう。 ・お忙しい中、評価及び方向性の検討を行い、すばらしいと思います。今後、新型コロナウィルス感染防止の観点から行えなかった保育園との交流が再開されることを願っています。 ・他人と自分の違いを発見することは容易に思いますが、いざ自分の成長している姿には気付くことが遅いと考えます。従ってそこに触れられることの一つが他人から褒められる或いは親から先生から褒められることに心地よさを感じながら自分自身の存在感を掴みながら子供たちも無意識の内に成長を大きくされるのではないかと考えるところです。 ・目標を設定してその挑戦する姿がまず大事ではないかと考えます。それでは、目標をオーバーしたり到達できなかった時にどの様に対処することが大切なのか、お互いに分かり合えることが共通課題として次の目指すことが現れてくると思われます。 ・授業を参観させて頂いていろいろ部分（主に素敵なところ）が見えて、緑小の素晴らしさ感じました。子ども達がとても元気で自分の意見を発表し、そのまま表現する力を養ってほしいと思いました。先生方の努力がすばらしいと感じました。